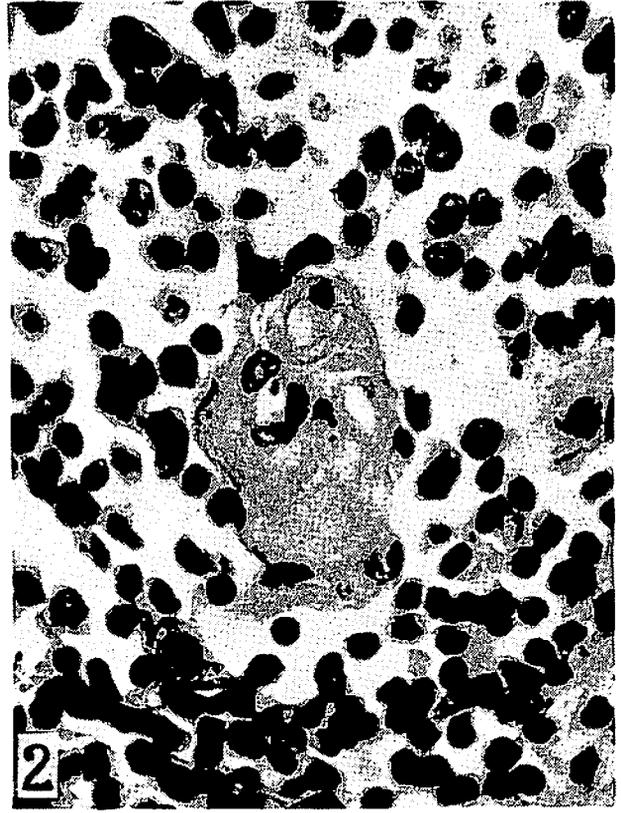
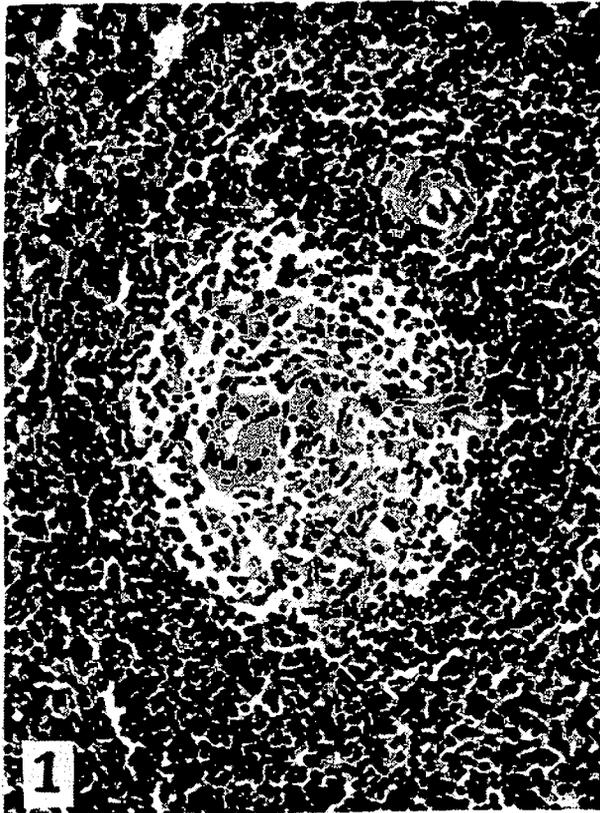


チンパンジー脾濾胞(胚芽中心)におけるフィブリノイド物質の沈着

北大獣医学部比較病理学教室出題 第11回獣医病理研修会標本 No.153



3~4歳の牝チンパンジー斃死剖検例。左大脳半球部硬膜下腔瀰漫性出血並びに大血腫、前脳灰白質略々全域の乏血性壊死、急性漿液-纖維素-化膿性気管支肺炎、全身性細菌性感染状態、を主病理像とする。

1) 脾濾胞概して萎縮性(肉眼でも脾萎縮性、濾胞指摘困難)。胚芽中心明瞭且つ細胞成分に乏し;変性細胞核、大喰細胞、多くはないが、目立つ。

殆ど総ての場合胚芽中心において、血管壁乃至周囲性にフィブリノイド物質沈着(Fig. 1, H-E, ×200)。

その血管は殆ど総ての場合、毛細血管乃至細小動脈なり(Fig. 2, H-E, ×800)。その壁細胞核腫脹を示す。沈着は塊状或は流れ広まる如くに行わる。塊状物質は屢々原纖維様構造物を包埋。沈着物質はアザンで青色、PAS陽性、コロイド鉄反応陽性、アルシアン青陽性、フィブリン陽性、コンゴ赤陰性。従ってその主成分は酸性粘液多種類と考えられる。

濾胞毛細血管乃至細小動脈においてmicrovascular alterationを明らかに示すもの屢々。即ち罹患血管の壁水腫性に疎鬆化し、膨化し、内皮細胞をも含め、壁細胞核概して腫脹を示す;毛細血管では内及び外膜相互の離遠状態よく判る(Fig. 2)。中心動脈乃至赤脾髓動脈も同様の变化を表わす。即ち、壁は水腫性に疎鬆化並びに膨化し、その不定部位に大小の空胞を有す;内皮細胞をも含め、壁細胞核概して腫脹を示す。

2) 濾胞の周縁部乃至周囲に軽度の好中球浸潤。屢々濾胞内出血。静脈洞拡張、内皮細胞活性化。洞内に好中球多少目立つ。時折静脈洞並びに静脈に纖維素血栓あり。髓索細胞成分に乏し。濾胞及び静脈洞に骨髓巨核細胞稀に見出さる。

3) 赤脾髓の被膜下或はそれ以外の部位にvasoformative meshwork tissuesの領域散在。

4) 脾門部神経束並びに脾材神経束において、軸索の変性極く稀に見出さる。脾動脈極く稀に部分的な軽度の内膜肥厚(水腫、膠原纖維増殖)を示す。

あり得る形態病理発生について:主成分が酸性粘液多糖類と考えられるフィブリノイド物質は殆ど総ての場合毛細血管乃至細小動脈と関係を持って沈着している。このことはこの物質が血液液体成分の濾出に大きく由来するということを示唆しているのではないか(このような考えの下では、この物質は水腫液 edema fluidとして取扱われてもよいのかも知れない)。この濾出の大きな成因として、microvascular alterationの存在によって推測されるところの、血管の透過性障害を臆測して見たらどうであろうか。極く稀に起っていた神経繊維(軸索)変性と同様の事象が相当以前の時期から起っていたとすれば、microvascular alterationもその時期に起っていた可能性があると思う。